

教職大学院 Newsletter

No. 49

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since 2008.4

2013.2.16

修士レベルの教員養成の組織改革の重要性

静岡大学教育学部長 梅澤 収

「学び続ける教員像」の確立のために、昨年8月に中教審は、「教育委員会と大学との連携・協働による教職生活の全体を通じた一体的な改革」、具体的には、①新たな学びを支える教員の養成と、②学び続ける教員を支援する仕組みの構築を提言した。9月以降の検討会議では、修士課程と教職大学院の新基準、そして専修免許の新基準等が検討されている。折から同6月発表の文科省「国立大学改革実行プラン」に基づく国立大学改革プラン策定の一環として、国立教員養成系大学学部は、「ミッションの再定義」が進行中であるが、修士課程と教職大学院の新基準は、教員養成改革に多大な影響を与えることは間違いない。

現実に眼を向けると、修士課程の教育学研究科は、必要専任教員数が多い（特支・幼児含むフル装備型で88名）のに学生定員が少ない、特に約6割を占める教科専門教員が活かされていない、現代的教育課題に対応していない等、地道な改革は確実に増加しているものの組織改革としては十分ではない。高度専門職養成機関として既に5年経過した教職大学院についても、25大学815名と量的には広がらず、2012年度は13校で定員割れである。（読売新聞 2012.8.27）

以上の教員養成の現状と中教審の中長期的ビジョンを見据えた時、国立教員養成大学・学部の実践的な課題は、教員養成の理論と実践の双方を対象とした教育研究組織を再構築することであろう。まさに、今後の「日本型教員養成システムの再生」は、この改革の成否にかかっている。

私見では、高度化対応の新修士課程（理論系）と新教職大学院（実践系）は、二者択一的な完結型のものではなく、理論系と実践系（臨床系）を併存させた「修士レベル組織」として整備されるべきであろう。その名称はこの際教育学研究科でも教職大学院でも拘らないとして、「教育学修士」と「教職修士（専門

職）」双方の学位授与権を持つ教育研究組織となる必要がある。より具体的には、教員80名程度で構成され、例えば理論系6割、臨床系4割で各専攻が構成され、各専攻が主機能を担いつつ相互連携する「開放系」の教育研究組織を構築することである。また、国立総合大学の場合、教員養成の修士レベル化は、学内他学部・大学院の「専門知」とのコラボも自然に可能とする。それは、大学の「専門知」を、小中高の学校教育にどう伝えるか、大学の一般教育で非専門学生にどう伝えるかという大学教育のあり方への問いとも重なっている。従って、教員養成の高度化の組織改革は、大学あり方を問いながら、全学の教育研究組織を内的に改革していく要（かなめ）の位置にあると断言できる。

冒頭に戻ると、「新たな学びを支える教員の養成」のモデル的存在として期待される国立教員養成系大学学部は、それを可能とする教育研究の組織づくりを足下から始めるべきであり、その効果は、学校・大学だけでなく人材育成や持続可能社会づくりに及ぶと考えるこの頃である。

内容

- 巻頭言 (1)
- スクールリーダー・フォーラム参加して (2)
- 冬の集中講座を終えて (6)
- 附属特別支援学校公開研究会に参加して (8)
- 東京ラウンドテーブルに参加して (9)
- 伊那小学校公開指導研究会に参加して (12)
- 拠点校だより (13)
- 福井ラウンドテーブル案内 (14)

◇ 大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会合同プロジェクト ◇

スクールリーダー・フォーラムに参加して

福井大学教職大学院 津田 由起枝

昨年に引き続き、大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会の合同プロジェクトであるスクールリーダー・フォーラムに参加した。大阪教育大学の院生の先生方については、昨年度からご一緒させていただいたり事前にレポートも拝見させていただいたりする中である程度の予備知識は持っていたつもりだが、困難を極める大阪の教育状況において、大阪の未来や自校の教育を実に熱心に熱く語るその姿に改めて心を打たれた。

本学の寺岡先生と大阪教育大学の太田先生による基調講演で、両大学の進めているスクールリーダーの学びについてコンパクトで的確な説明をお聞きした後、午後は、いよいよ、今回の目玉であるラウンドテーブルのスタートであった。



Bテーブルは、伊丹市立東中学校長の太田洋子先生と、帝塚山学院大学アドミッションセンター参与の深野康久先生のご報告を中心に、大変熱心なグループ協議が続いた。太田先生のご報告内容は、伊丹市教育施策企画担当としてのご経験（伊丹ならではの強みを生かした教育づくり、学力調査の結果を受けた学力向上策、教育に関する市民意識調査の実施と分析、伊丹市教育ビジョンの策定、学校マネジメント研修の実施、いじめ問題等課題への迅速な対応など）、学校長としてのご経験（東中の強みを生かした学校づくり、ファミリーサポーターズの設定、地域活性隊の活動開始、社会教育施設との連携、主幹教諭を核としたリーダー養成と主任会議の活性化、若手教員の育成など）を通して、強みを生かした学校づくりを目指すというものであった。あまりのパワフルさに、「困難な状況の中でどのように局面を切り開かれたのか」との質問では、「困ったときには行政経験で知り合った多くの人のネットワークが助けになったこと、一歩が踏み出せないときは、とにかく参

考資料を収集し、多くの方の意見を聞きながらまずやってみることが重要」と答えておられたのが印象的だった。一方で深野先生は、大学院に再チャレンジされた経緯（40年前と今回の2度の院生活）から、教員を退職されてなお、大学院で学ぶことの意義をじっくり語られていた。1度目の院時代では、文化人類学や文化地理学を志しながら学問研究の世界になじめなかったこと、その後18年間の教員生活、6年間の行政生活、10年間の府立高校校長としての生活を経て、今改めて「自分の言葉で教育改革を語りたい」という強い思いに捕らわれるようになったこと、それが今回のテーマ「校長の経験知を研究知に、そして学校に」つながっていることを、これまた、深い思いを込めてお話くださった。行政時代さらには校長会長時代の辛い思い出（現場の先生方の苦労や工夫、努力を他の人たちに伝えきれなかった反省）から、是が非でもそのことを学問的・理論的にまとめ、説得力をもって語るの必要性を感じておられることが伝わってきた。福井大学教職大学院が目指す「組織学習と世代継承サイクルを組み込んだ実践コミュニティの形成」という視点からは随分趣が異なる捉え方ではあったが、なぜ大阪教育大学夜間大学院が理論的基盤を大事にしながら実践的指針を探究することを基本にしているのか、実践的研究力と実践的指導力の二兎を追うことを重要ととらえているのかが少し理解できたように感じた。

お二人の報告から、管理職としての飽くなきチャレンジの姿とそれを下支えする大学院の学びを十分受け止めることができた。福井の私たちにとっては新鮮な驚きであると同時に、エリアを超えて、教育に身を置く者としての共感と明日からの学びへの刺激を受けた1日であった。



福井大学教職大学院 濱口 由美

本稿では、Eグループにおける話し合いについて、司会を務めさせていただいた筆者の感想を織り交ぜながらレポートさせていただく。

長井勲治先生報告の話し合いの場から

「トチの木のような」長井先生がこれまでの取り組まれた学校改革の報告を聞きながら、私はそんなことを感じていた。それは、子どもはもちろんのこと教師の力を伸ばしていくための環境を創り出す枝葉とそれらが世代を超えて受け継がれるための強い根をはらせていくような学校改革に、長井先生が取り組まれてきていたからである。

長井先生は、兵庫教育大学大学院を修了後、このトチの木のような学校改革を三つの高校において取り組まれた。最初の2校の学校改革は、普通科高校を普通科総合選抜や普通科単位制といった新しいスタイルの学校改編という大阪府や国のミッションを受けての改革。その先鋭的な学校改革に目標に向かって、中核中堅教員の立場から取り組まれてきた。課題の抽出からはじまり、チームの協働はもちろん、伝統が受け継がれるための組織編成、教師だけでなく地域の人材も活用したカリキュラムデザインなど、細部にわたって練り上げられたものであった。3校目は、校長（1年目は教頭）と言う管理職についてからの学校改革。大学院での学びと二つの学校改革からの経験を礎にしながら、生徒や保護者とも丸くなって取り組もうとポップな発信の場なども取り入れた洗練されたマネジメントの実際を語ってくださった。

このようにレポートを綴っていくと、スクールリーダーとしてのサクセスストーリーのように感じられるかもしれないが、長井先生は学校改革の鍵となる重要な課題を学校改革進行中である3校目の取り組み報告に内在させていた。報告後の話し合いでは、長井改革の背後にある大阪府の状況などが伝えられたこともあって、その課題がグループの中で少しずつ共有化され出した。それは、中堅教員立場から取り組む学校改革と管理職として取り組む学校改革のマネジメントの差異や改革の指針ともなるミッションを同僚教員たちと共有していくことの難しさといった課題であり、実践の場で学校改革に真っ向から取り組んできた者でしか見出すことのできない枢要課題であると感じさせられた。

白井正之先生報告の話し合いの場から

お二人目の報告者は、東大阪府小学校の元校長、現在は大阪教育大学非常勤講師の白井正之先生。白井先生は、ご自身が学校教員時代から執筆されてき

た数多くの報告者や論文を振り返りながら、スクールリーダーとしての成長の過程を語られた。白井先生の語りは、長期に渡る学校改革の取り組みを丁寧に語りながら、教師教育の実践研究者として今後の教職専門性開発を目指さそうとするビジョンも同時に伝えるものであった。そのビジョンの一つは、これからも大学での実践者として活動し、実践と理論を対話させながら論文にまとめていくこと。もう一つは、個の学びを様々な教師教育の場に還元していくために、人や場所がつながる学び合いの場を創り出していくこと。報告書や論文作成が実践と理論を深海へと紡いでいくような学びの場であるならば、人や場所がつながる学び合いは、様々な人たちの実践と理論が水路となって自らが学び続けるための土壌を広げてくれるのであろう。白井先生の語りを聞きながら、このような学びの場を守り継いでいこうとするプロセスこそが、実践と理論とが融合された研究成果そのものではないかと考えさせられた。

それにしても、退職後も衰えることのない白井先生の学びへの強い思いはどこから湧き出てくるのだろう。ご一緒させていただいた宴席でそのことを訊ねてみた。すると「学ぶことの楽しさを知っているからです」とあっさりと答えられた。（まことに、あっぱれです…）

白井先生の報告後の話し合いは、本当に短いものになってしまったが、学校評価についての話題がでた。「外部評価者として何ができるであろう」「学校評価の場が、学校改革について共に学び合うになるといい」といった意見が、外部から評価する者・内部から振り返る者といったそれぞれの立場から交わされた。

今回のラウンドテーブルで見いだされたいくつかの課題は、福井にしっかりと持ち帰り、学校改革の道しるべになるものとして報告したいと思いながら、グループの話し合いを終えた。



福井大学教職大学院 山下 忠五郎

「教師の実践的指導力の向上と実践的研究力の獲得」を目指している大阪教育大学のフォーラムに初めて参加した。10時30分から16時30分まで昼食の1時間を挟んでびっしりとスケジュールがくまれていた。ただ、最後の日程の全体報告、総括講演はこのあと出されるという報告書に任せ、参加者それぞれがラウンドでの学びを振り返り、明日への思いを膨らませながら帰路につけたほうが良かった…と思った。

さて、そのラウンドですが、私のグループでは、大阪教育大学大学院スクールリーダーコースM2の教頭先生と平成22年度に教職ファシリテーターコースを卒業した中学校勤務の指導教諭から報告があった。

教頭先生は、特別支援教育に永年たずさわってこられ、現在は小学校の教頭先生である。京都教育大学に内留、府の個別指導計画プロジェクトチームに参画、臨床発達心理士の取得など学ぶ意欲の旺盛な先生である。大学院では、「教職員の評価・育成システム」の効果的な運用について研究している。制度に対する批判もあり、運用上も困難と言われている「教職員の評価・育成システム」を効果的に運用し学校改善につなげていこうというのである。

指導教諭は教員生活30年目、現在7校目の学校に勤務しているが、その全てが俗に言う「しんどい学校」であった。彼は、ゼロトレランス理念に基づいた生徒指導の実践・研究や「グループ協同学習」を取り入れた授業改善を通して学校づくりに懸命に取り組んでいる。しかも、自分の学校だけでなく全学的な取組にまで広げようと努力しているところが

素晴らしいと思った。

両氏とも、それぞれの置かれた立場で、子どもたちのためにと一生懸命学校改善に取り組んでいることがよくわかった。また、多忙な日常の中で、同僚の理解があったとはいうものの、午後5時に学校を出て大学で学ぼうという意欲に強い意志を感じた。

一方で、大阪の現実にも驚かされた。生活保護や就学援助の割合の高さ、組織としての授業研究が実践に至っていない学校があるということ、管理職が超多忙、校長の権限強化と校長の強力なリーダーシップによる学校経営などである。

最後に、「大学院卒業生が、今も定期的に自己の教育実践報告会を開いて教師としてのそれぞれの成長を確認・批評し合っている。教職大学院での研究成果は、在学中のみならず卒業してから、学校運営・教科指導・生徒指導等の分野でさらにバージョンアップして現れてくるものでなければならない。」というK氏の言葉は印象的であり、本学の今後の課題だと思った。



福井県教育庁義務教育課指導主事 高橋 和代

まず、寺岡教授の「実践コミュニティにおけるスクールリーダーの学び」の御講演を拝聴した。「夜間主・学校改革実践研究コース」からの経緯や、教職大学院でのカリキュラムデザイン、教師の専門性等について伺う中で、改めて学び直した。そして、素直に語り聞き合うことを通して学んでいたあの時に時間が戻っていくのを感じた。

続くラウンドテーブルでは、大阪府教育委員会の中西指導主事、大阪府立高等学校の福永校長、宝塚市立中学校の高木教頭と御一緒させていただいた。

高木教頭の溢れるチャレンジ精神と向学心、そして調整力に感動し聞き入ってしまった。公立中学校、日本人学校、附属中学校、教育委員会と、語ってくださった30年程の時がなんと密度の濃いものか。学び続ける教師というよりも向上し続ける教師という感じがし

た。高木教頭には“逃れる”という言葉がない。あるのは“挑戦”のみ。特に2つの附属中合併に伴う「研究の方向性の合意」は、研究が柱の附属においてどれだけ大変なことであったことか、想像するだけで気が滅入るのに先生は糸口を見つけ実践されまとめ上げられていた。ポジティブシンキングの実践力を見せつけられた。

福永校長・中西指導主事は、まさに素晴らしい聞き手の見本であった。うなずき、リボイスし、語り手である私の頭の中を探りながら傾聴してくださっているのがわかった。何より福永校長・中西指導主事各々の「課題」と照らし合わせながら発表者である私の語りを聞いているのが伝わってきた。大阪府は来年度から保護者の教員評価が現場の教員の「評価」に反映されるそうである。「保護者に『静かな教室で授業を行

える教師がよい教師ではなく、子どもが学んでいる授業を行える教師がよい教師である』と理解し評価してもらえるように努力したい」とおっしゃっていた。中西指導主事の大阪市の事業を想定しながらの聴き方や、全体報告会での時間を把握しながらの「分科会内の話の特徴を明確に捉えた過不足ないわかりやすい報告」は、行政に身を置く者としてお手本になった。

大阪教育大学大学院の院生は、課題意識があるから大学院の門をたたいた方々ばかりである。学びへの意欲が大変強いと感じた。通常勤務をこなしながら配慮や優遇もないことを承知の上で入学し、自分で時間を工面し大学院へ学びに行く。それも管理職になってからでもである。大学院が大学の次の進学先ではなく「生涯学習の場」として位置付けているのを感じた。私が感じた「大阪教育大学大学院と比べることから見えてくる福井大学教職大学院の強み」は“コミュニ

ティ”と“連携”と“進化”である。「院生同士の学び合い」「担当教員だけでなく多くの教員からの助言による学び合い」「現場の他の教員や修了生をも巻き込んだ学び合い」等、様々な“コミュニティ”が存在し、多角的な気づきと学びの深まりを学び手にもたらしてくれる。また「大学」「教育委員会」「学校」の“連携”は、短期的な目の前の課題だけではなく、ライフワークから生じる長期の課題に寄り添った教師の学びを支え、教師の専門家としての力量形成を可能にしている。そして、過去の院生の報告書や大学院のカリキュラムを常に見直し、外からの意見を取り入れ、実践をもとに新しい実践研究を創っていく“進化”する大学院の姿は、「持続可能な社会を創るためにはこうあるべき」という姿を示してくれている。共通と相違を感じる刺激的な1日だった。感謝。

丸岡南中学校 渡邊 朋重

平成24年11月24日、大阪教育大学にて行われたスクールリーダーフォーラムに参加させていただきました。話を頂いたときは、現役の院生とのペア、現研究主任の遠藤先生と丸岡南中学校での取り組みを報告するという理解で、快く引き受けました。ところが、しばらくして送られてきた文書を見てみると…なんと、各個人の報告となっている！後日届いた参加者名簿を見てさらにびっくり！大阪府教委や大阪市教委の指導主事、校長教頭といった先生方や、首席という見慣れない文字がならんでいたのです。このような場で自分の拙い取り組みを報告する意味があるのだろうか…。今回のフォーラムは、大きな不安を抱きながらも、無い袖は振れぬ、自分がやってきたことを精一杯報告するのみ、と覚悟を決めての参加となりました。

午前中に大阪教育大と福井大それぞれの教職大学院について講演があり、午後には今回の目玉とされていたラウンドテーブルがありました。ラウンドテーブル方式は、大阪教育大では初の試みということでした。自分が福井大学教職大学院で経験してきたものと比べて、いくぶん短い時間設定となっていました。いつものペースでじっくり語っているのは、与えられた時間内に報告を終えることは難しいと感じました。

同じグループで報告された山中先生は、特別支援学校の教頭という多忙な中、週2日のペースで夜間大学院に通われていました。大阪の特別支援学校は、大きい学校では職員数が150名を越えるという。そのような大規模校での勤務に対する不安から、夜間大学院で学校経営について学ばれていました。管理職となつてなお、夜間大学院に通いたいという山中先生の熱い思いに触れ、感銘を覚えました。大阪教育大の夜間大学院では、山中先生のように管理職が学ぶ場合が多い

と聞きました。ミドルリーダーを養成し、ミドルダウンアップによる学校改革を学ぶ福井大学教職大学院との相違点であると思った。

ラウンドテーブルは、参加者が本音で語り合う、というよりは大阪教育大夜間大学院と福井大学教職大学院とを比較し、すぐ結論づけるような展開で、正直戸惑いを覚えました。報告を聴いて一人ずつ感想を言うのみといった感じで、一人の発言から議論が広がっていくことも制されるように感じられ、消化不良の感は否めませんでした。しかし、それには訳がありました。自分たちのグループでファシリテータを務めてくださった大阪教育大の木原教授は、ラウンドテーブルの全体会での報告者となっていたのです。短い時間で結論まで持っていかなければならない、ということだったのでしょう。小グループでの協議内容をもとに、理論知と実践知の対話という今回のテーマに沿って、大阪教育大と福井大の学びの共通点・相違点について、わずかな時間でまとめられていました。

あまり道筋を立てずに、思い思いのことを自由に語っていく中で、課題を見つけ考え方のヒントや糸口を各自でつかんでいくのが、福井大学教職大学院のカンファレンスやラウンドテーブル。一方、協議の柱に沿って効率的に答えを見いだしていくのが、今回のラウンドテーブルであるというふうに感じました。複数回を見越した大きなスタンスの中での協議と、この1回で成果を出すという目的をもった協議の違いのなかなと思いました。

一時はたいへん気が重くなつての参加でしたが、3月に大学院を修了して以来のラウンドテーブルで、久しぶりの感覚を楽しむことができました。今回の貴重な体験をさせていただいたことに感謝いたします。



冬の集中講座を終えて

スクールリーダー養成コース2年／板橋区立赤塚第二中学校 岡部 誠

冬期集中講座を終えて

月例のカンファレンスでの学び合いと同様、特に冬期集中講座はこれまでの学修を振り返り記録にまとめていく、大変貴重な機会である。実践と省察の循環を言語化し、考察を加えて探究する難しさとの格闘でもあるが、コラボレーションホールのどのテーブルでも、スタッフの方々やリーダーの先生方、そしてストレートの方々の真剣なまなざしと熱心な思考の交流が、今回も私自身の情熱をかきたてるエネルギーとなった。

さて、冬期集中講座サイクル1の初日の冒頭、柳澤昌一先生が長期にわたる実践を「峰」に例え、次のように表現されていた。

「1つ1つの峰(実践)を捉えることに加え、その峰を全体の連峰(実践と省察による脈絡)として眺めてみると、どのような景色が広がっているのか。その当時の状況を思い浮かべながら連峰を描いてみると、実践した当時と考察している今、さらには吟味しながら記録している時点とでは、眺める景色の見え方が異なっていることに気付くかもしれない。そして1人1人の展望は、気が遠くなるほどの時間を要するが、長期のスパンで捉えると、長期実践報告を書くという行為が教育改革の手助けとなっていく。」とおっしゃっていた。私はこの話を聞いて、改めて長期実践報告の持つ意味を考え始めていた。

1つ目はもちろん、私自身の実践と省察の循環を記録する中で、教師としての専門的力量が高まる実感を抱いていることである。私個人の力量の変容は、同僚や組織、コミュニティ形成の視点で物事を探究する、という具体的な実践となって表れてきている。

2つ目は、私の長期実践報告を読んでいただく今後の方々への継承を強く意識して執筆していることである。すでに発刊されている数々の長期実践報告によって私自身の研究が支えられてきたように、次は私が後に続く意欲あるの方々への支えとなりたい、という信念で書き続けてきている。

冬期集中講座はそれぞれの思いを胸に、過去の実践を省察によって未来へとつなぎ、互いの専門性を生かした思考の交流から新たな問いがはぐくまれ、探究していく時間となった。

平成24年度ミドルステップアップ研修に参加して

「ミドルステップアップ研修」は、福井県教育研究所教職研修課の金森誠先生(スクールリーダーM2)がコーディネーターする教職員研修の1つである。受講者は、福井県内の中堅教職員が集い、学校経営分野(校内組織活性化のためのマネジメント)と学習指導分野(授業改善のために学び合う教師集団)をテーマとしながら、個人の知識・技能の習得から学校全体の教育力向上を目指す取り組みとして研修が運営されている。私はこうした福井県の先進的な取り組みを体験し、有用な実践を板橋区にも吸収したいと強く思い、参加させていただいた。

さてこの研修の注目すべきは、受講者が教職大学院と同じく長期の展望を描いた「実践記録」を持ち寄っていた点にある。そのため日常の実践がすでに研修の一貫として組み込まれている仕組みは、実用的な研修形態と言える。つまり、自身の実践を記録することで当時の状況と記録時の考察を重ね合わせて再検討する機会に恵まれ、語り、傾聴し合う中で、個人と組織の展望が開けてくるのである。また、[課題設定→理論習得→事例研究→省察→次の課題設定]というトルネードマネジメントを研修の根幹に位置付けて運営している提案は、どの分野においても応用が利く手法である。

当日は、福井大学教職大学院のスクールリーダーに加え、上越教育大学からの参加者も含めおおむね4人グループで構成されていた。同じ“ミドル”でも、校種や研究テーマの異なるグループ編成のため、どのテーブルでもより深く追究する姿勢で協働が図られていた。この研修会の意味は「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(中央教育審議会答申(2012.8))」を受けて、教育委員会と大学との協働・連携の在り方を模索する先進的な取り組みとして実践されたことにある。私自身もこの研修会で体感した経験を、教室や学校組織、さらには今後の教育行政の中で生かしていけたらと考えている。

私は、教職大学院での学びが着実に県内各所へ浸透していく実践である、と実感した。そして、福井県の教育が“最先端”といわれる所以が理解できた研修会でもあった。

教職専門性開発コース2年／鯖江高等学校 辻本 友舞

12月25日のクリスマスの日、サンタクロースから「長期実践報告書を進めてください」というプレゼントをもらい、冬の集中講座(6日間)は始まった。毎月の合同カンファレンスとは雰囲気異なり、焦りや緊張感が漂っていたような気がした。そのような雰囲気の中で、私は「どんな風にかこうかな」とのんきに考えていた。

この期間は、それぞれが長期実践報告書を書き進めるために、パソコンに向かってきた。今までやってきたこと、書きためていたものを時系列でつなげていったが、つなげただけでは自分が追い求めているものが分からず、考えるばかりであった。書けるところから書き進めようと思い、現在取り組んでいる部活動の指導について、ありのままを綴ってみようと思った。思いを文字に

表すことは難しかったが、文字にして見つめることで、私の信念が明確に見えてきたのである。私は生徒の心を育てたい、社会に出るときに一人の人間として立派に成長してほしい。また、多くの人とかかわり互いに影響を与え、支え合いながら人生を謳歌してほしい。『人』を大切にできる人間に、心が豊かな人間になってほしいと思いつつながら指導していることに、書きながら気付くことができた。

カンファレンスの中で、「こだわりを捨てるのは難しいが、変わり続けていきたい。変わり続けるということは、学び続けるということ。」という言葉聞いて、私自身も同じような考えを持っていることに気付いた。学び続けるということは、生徒どうしの学び合いだけでなく、教員どうしの学び合い、教員と生徒との学び合いなど、共に高まっていくことが大切だと考えている。自

分が大切にしている軸はぶれないように持っておきたいが、生徒を主体としたかかわり方や授業展開を常に意識して改善していきたい。「教師は一生、学び続けること。挑戦し続けること。」これは、この2年間で学んだことである。「人は人の中で人になっていく」という思いを胸にたくさんの先生方と語り、常に学ぶためのきっかけをいただいていた。これからも、学んだ日々の思い出を大切に、かかわった全ての人々に感謝しながら、新しいことに挑戦し続け、学び続けていきたいと思う。

最後に松木先生は、「認識フレームが変わることは、喜びである」ということを話されていた。自分と向き合うことには、苦しみをともなうが、その苦しきから逃げたてしまうと何も生まれてこない。もう一踏ん張りすれば、きっと苦しみが喜びに転換すると信じて、納得のいく長期実践報告書を完成させたい。

スクールリーダー養成コース1年/武生東高等学校 野坂 智裕

合同カンファレンスで最近話題になることの一つに、次の世代の先生方に何を残すことができるか、というものがあります。自分たちの引退が近づいてきていることをふまえての言葉ですが、正直自分には全くその意識が欠如していました。

私が教員になった頃は、35歳以下の先生が全体の半分近くを占めているような状況で職員室も随分賑やかでした。若い先生というのは、そこにいるだけで生徒が集まってくるような瑞々しいオーラがあります。(もちろん年配の先生にも素敵なオーラがありますが。)しかしその後、少子化の影響もあって年下の先生の採用数が減少し、私はいつまでも一番若い集団から抜け出せないまま月日が過ぎました。ようやく若い先生が増え始め、自分も中堅の仲間入りを実感し、これからは今まで以上に責任ある仕事をがんばろうと思っていた矢先に前述の話題に触れることとなり、正直、焦りと戸惑いを感じました。

以前は退職していく先生方の若い頃の姿を思い返してみると、職場の先輩として懐かしく思い出されるかつての姿はいつも自分より年上でした。したがって、定年は遠い出来事で今ひとつ実感がわきませんでした。ですが今は、教師になった頃40代だった先生方が次々と定年を迎えており、気がつけば自分がその年齢に迫りついてしまいました。意識すればゴールまでの景色がリアルに想像でき、残された時間もそう長くはないと気づかされます。

今回のレポートでは、「次の世代に残していくもの」という言葉を頭の片隅に置きつつ、前半は、自分の今までの教員生活の中で印象に残った出来事を掘り起こしたり、それが現在の自分にどのような影響を与えているかを探りました。また後半は現在勤務している高校で行った有志による話し合いの中で特に話題になったこと、例えば「生徒の実態」「保護者との関係」「生徒参加型の授業について」「世代を超えた教師の交流とは」等をまとめてみました。

この作業を通して感じたのは、インプットだけでなくアウトプットすることの大切さです。普段私たちは様々な出来事を通して経験知をインプットしていますが、文

章化してそれを形式知に変えるという作業とは無縁です。したがってそれらはマグマのように溜められ、無作為に抽出されているのが現状でしょう。しかし書くという作業には次のような効果がありました。第一に、知識が整理されて、その一つ一つに意味付けがなされること。これによって自分の思考の前提になっていたものの正体が改めて形を持ち始めました。第二に、あるテーマに関する書物などを読んだとき、受け止めるこちら側の器に形が生まれた為、自分の考えと比較考察できるので記憶として残りやすくなったこと。第三に、これが一番驚きでしたが、書くという作業をしていると次々と記憶が呼び覚まされるということです。この記憶は出来事そのものであったり、ある時つかんだ考え方であったりと様々でしたが、書く行為と同時に並行で連鎖的に蘇ってきます。脳科学者の茂木健一郎さんは、今年の10月に織田小学校行われた講演の中で「インプット(感覚学習・読む)の後に、アウトプット(運動学習・書く・話す)を行わないと学習のループが成立しない。書く等の行為でループが閉じ、言葉というものを自分のものにすることができる。」と述べましたが、私は「ループが閉じる」という抽象的な言葉の意味を図りかねていました。今回実際にアウトプットしてみて、このインプットしたものが連鎖的に蘇って相互に関連した形で位置づけられていく体験がそれに近いのではないかと感じました。

いろいろと書きましたが、集中講座を通してやはり一番思い知らされたのは自分の未熟さです。特に、日々の仕事に追われながらも毎日こつこつと積み重ねて論文を書いておられたM2の先生方の姿を見ると、自分のあらゆる力不足を感じずにはいられません。私はとはいえ、一気にレポートを仕上げようとした無理がたたって年末と新学期に体調を崩してしまい、「夏休みの宿題を後回しにした昔の性分はいつまでも直らないものだ」と、ひどく情けない気持ちになりました。

『馬上少年過ぐ 世平らかにして白髪多し 残軀天の赦す所 樂しまずして是を如何にせん』とは伊達政宗の晩年の漢詩ですが、ここには自分の人生を生ききった者の充実感が溢れています。自分が退職する時「共通する感

概は『白髪多し』の部分だけだな。」とならないように、日々少しずつでも努力を続けられる人間になりたいと思

います。

教職専門性開発コース1年／中藤小学校 後藤 歩実

私は中藤小学校の特別支援学級でインターンシップをさせていただいています。日々学級の子どもたちと一緒に勉強したり、遊んだりする中で『4月と比べて大きく成長しているなあ。』と感じることが多くあります。今はそんな子どもの変化に驚いたり、感動したり、時には悩んだり毎日刺激いっぱいの生活をおくっています。

冬季集中講座が始まる前は、そんな日々の生活の中で「私が感じた子どもたち一人ひとりの頑張りや成長や子どもたち同士のかかわりをまとめたい！残したい！」と考えていました。しかし、集中講座の最初に柳沢先生からのお話があり、私は子どもたちの成長をまとめて書き上げたものを通して『何を伝えたいのか？』ということをしっかり考えられていなかったことに気がきました。思い描いていた構想で書き上げた先に『何を伝えたいのか？』ということが出てくるのか？このような状態で書き始めていいのだろうか？ということが不安になり、そのことを同じテーブルの先生方に相談しました。

そこで柳沢先生に、「実践っていうものは積み重なってどんどん上がっていくようなものだ。(らせん図)」「つじつまを合わせようとしちゃだめだよ。」とアドバイスをいただき、子ども一人ひとりの軸ではなく、私の軸で書くという風に当初考えていた構想と大きく変更することにしました。また、特別支援の担当の笹

原先生にも相談にのっていただき、その中で「特別支援学級ってどんな場所？」という大きな柱となりそうな間を見出すことができました。4月に今まで全くかかわる機会のなかった特別支援学級に飛び込んで、私が子どもたちとかかわったり、メンターの先生の指導法や子どもとかかわる姿を見たりして、私はたくさんの「特別支援学級ってこんな場所なんだ！」という発見をしました。今はそのことを軸にまとめていくことで私にとっての『特別支援学級』の一つのモデルができるような気がしています。

3日間の集中講座では、「特別支援学級ってどんな場所なのだろう？」という視点で記録を振り返ることで精いっぱい、パソコンを開くことはありませんでした。しかし、この3日間でじっくり考え、たくさんの人からアドバイスをいただいたことによって、何となく長期実践報告書の柱となりそうなものを見つけることができました。また、振り返って自分の視点を整理することができたことによって、今まで以上にこれからのインターンシップでの実践が楽しみに感じています。来年度は今年度ほど学校へ行く日数は少なくなると思うので、この集中講座での学びを活かして、しっかり子どもと向き合い、授業づくりや関係づくりをしていきたいと思っています。

福井大学教育地域科学部

附属特別支援学校公開研究会に参加して

去る11月21日に附属特別支援学校の公開研究会に参加しました。1年に1回くらいしか訪れていないのですが、子どもたちの活動を実際に見ることができる機会は嬉しいものでした。

公開授業は各学部ともクラスや学年を解いた集団での特徴ある活動でした。私は各学部の授業を見て回りましたが、どの授業場面からも、先生や友だちと、さらには参観者達とかかわったり接したりすることがとてもスムーズでありまた喜びであると言うことが伝わり、印象的でした。普段から、先生方が子ども理解や関係作りに心がけ、支援や指導がうまくなされているのであろうと感じました。高等部で粘土を熱心に計量していた焼き物班の生徒さんたちが、どのように作品を作ったのか、またどのように他の生徒さんたちとかかわって学習を進めたのかについて、私が他の場所へ移動してしまったため確認できなかったことが心残りでした。残念！

附属特別支援学校では、昨年度まで「自分らしく生きる学びの創造」の研究テーマの下、より良い社会参加につながるための学びのプロセスを追求し、一連の成

果が得られて4年間の取り組みが終了したことで、今年度からは新しい研究テーマが設定されました。新テーマは、「学校・家庭・地域のつながりの中で育つ生活教育の今日的意義を探る」という私にとって興味深いものでした。

公開授業の後の全体会で、校長先生から附属特別支援学校としてのこれからの在り方や生活教育に関してテーマに基づくお話がありました。創立40周年を経て生活教育を見直す1年目であり、本校の生活教育は技術や反復練習などではなく、自発性を促すスモールステップで見通しを持たせる、自分のことばで語る生活教育をめざしたいと、力強いお話があり今後の取組に期待感を持ちました。

最後に参加した第3分科会では、家庭生活の充実に向けて必要な視点を整理し効果的なかかわりを探る、さらにはネットワークのあり方について研究することを目的に、「家庭生活の充実につながる支援を探る」というテーマで協議が行われました。障害があってもなくても同じかと思いますが、家庭生活の充実は、個人の条件と

福井大学教職大学院 松井 富美恵

家族や家庭の条件がある程度整ってなければ得られないことであるし、そのためには仕事や余暇生活の充実なども大きく関係する重要なテーマなので、関心があり参加させてもらいました。

目的に迫るため、主に二つの取組（A，B）について、研修、実践、情報共有、連携の四つの視点でアプローチし研究していきます。二つの取組のうち、取組Aは、学校全体としての基本的取組で、「からこ教室」（希望者の健康相談）の事例をデータベース化して他のケースへの参考にしていくというものでした。また、性に関する指導や食育指導も扱うとのことでした。取組Bは個人の事例を通じた取組で、四つの視点に基づいた事例の紹介がありました。報告のあと協議が進む中、事

例を検討し共有するのはとても大事だと思いますが、様々な話を聞きながら、保護者・家族の思いや考えも家庭事情も様々な中で、学校の取組が保護者に理解され一緒に進もうとなるには、困難なこともあるのではないかと、普段から学校と家庭の協力関係が築かれ下地はあるにしても両者をつなぐ工夫や手だては何だろう、と考えていました。

最後に、当たり前ですが、入学してからの子どもの育ちを、その都度両方で確認して喜び合う、考えを出し合い共有する、以後に活かしていくというような地道な取組がやはり大事であり、そのためには個々の教員と教員集団の将来を見通した指導というものが必要なのだと改めて自分に確認しました。今後の研究の展開が注目されます。

東京ラウンドテーブルに参加して

教職専門性開発コース1年 中村 諒

2日間の東京ラウンドテーブルは私自身再認識する場でもあり、新たな気付きを生む場でもあった。これまで約1年をかけて行ってきた教師と生徒の包含的な関係づくりを軸に話を進め、なぜ私が関係づくりを重視してきたのかを振り返りつつも、やんちゃな生徒たちが荒れた理由や私との関わりを軸に話を進めていった。聞き手として同席していたナターリア先生はやんちゃな生徒たちの関係性に感心を持ってくださり、彼らの関係性の中でAくんがよい方向へ変化することが、やんちゃな生徒のEくんを大きく変化させる可能性を持っていて、彼がキーパーソンであるというご指摘を受けた。また彼らには、地域の方が学校に出入りし、教師以外の視点で働きかけることがこれからもっと必要になるのではないかとのご指摘もいただいた。

議論が進む過程で、彼らの居場所のなさや、Aくんが野球を終えてから段々と「荒れて」ってしまった背景には、野球という自分の存在を証明できていた場所を失い、勉強や友人関係で困るなかで、自己肯定観が失われてしまったところが大きいのではないかと話になった。それが影響してAくんを不適切な言動に駆り立て、またBくんやその他の生徒にとっては、これから先の進学先や将来設計図を立てられず、今生きていることがどんなに苦しいかを悩まされることになると感じた。Cくんとはバスケを通じて、Dくんとは勉強を通じて、EくんやAくんとはクラスでの活動を通じて、関係づくりを行っていき、BくんやFくんとは声かけを続けていくべきであるとも感じる。

同テーブルであった早川先生の発表では、定年退職で卒業された人達が何かできないことはないかと考えた際に、「定年退職を迎えた人達の相手を募集します」といった定年退職者に対応する・対処するといった“してあげる”仕組みでなく、「幼児児童向けのおもちゃを作成するボランティアを募集します」といった“していただく”関係として役割を持つことが重要ではないかと感

じられた。定年退職の方の自己肯定観ややる気を起こすきっかけとなる面があるので、働きかけ一つにも工夫があると感じた。これはやんちゃな生徒たちに何かしらの対応することや、何かサポートをしてあげるといった仕組みが今は残るが、それを除いて、彼らにお願いする、それこそ地域の人と共に料理を作ることや、一緒に畑作業を行うといった**仕事**を彼らに“お願いする”ことが必要であり、それが自己肯定観を持つ一つになるのではないかと感じた。

以上の話を聞いていく中で、やんちゃな生徒たちと関わっている私自身が彼らのおかげで、インターンが楽しく救われる面もあり、また自身の自己肯定観を育む一つではなかったのかと感じる。やんちゃな生徒たちと関係づくりを行えている自分、やんちゃな生徒との関わりを認めてくださる学校での自分、その関係性を理解してくれている生徒に見られる自分といった面に自信を持ち、関係づくりを行わせていただいている状況でもあったと感じた。偏りを生まれないようなクラスの生徒との関係の難しさや全体への働きを苦手とする今、やんちゃな生徒たちと関わることによって、気持ちが楽になるといった、彼らのおかげでインターンにおいて包含されているという事実の話の中から自身が気付いた。この事を理解しつつ、ある種彼らに感謝しつつも、「ケアする-される」を超えた関係づくりをこれからも多くの生徒と築いていきたいと考える。



スクールリーダー養成コース1年 加藤 学

1月12日(土)・13日(日), 明治大学・アカデミーコモンにて東京ラウンドテーブルが開催された。正午すぎに東京駅に降り立つと、雪の残る福井駅とはうってかわっての素晴らしい晴天。気分も晴れやかに明治大学のある御茶ノ水へと向かった。まず驚かされたのが、会場となっていたアカデミーコモン11階からの眺めである。東京ドーム、武道館などを見下ろす絶好のロケーション。晴天と相まった素晴らしい景色に、携帯を取り出し思わず記念撮影、お上りさん丸出し。しかし、会場を見渡すと彼方こちらで同じ光景が。他の参加者の方と話をすると「東京でもなかなか見られない眺め」とのこと。ちょっと、ひと安心。13:00頃にはまだまばらだった参加者も開始時間の13:30には会場を埋め尽くし、今から始まる2日間の「学び」に胸が高鳴っていった。

1日目のSession Iは、Zone A「学び続ける教師を支えるために」、Zone B「『実践と省察のサイクル』による実践力の形成」の2つの会場に分かれて開催された。私は、Zone Aに参加登録されていたが、行きの新幹線の中から決めていたZone Bの方に迷わず参加変更を決めた。Zone Bへの参加者は、パネルディスカッションでの報告者を務めた教職大学院の杉山晋平先生以外は福井大学から誰もおらず、会場に集まった方のほとんどが、学校教育ではなく社会教育関係の方々であった。まず、明治大学の学生による「実践とラウンドテーブルの取り組み」についての発表を聞いた。社会教育主事課程における実習の振り返りを、教職大学院での合同カンファレンスのような形式で行っているという報告で、学生の学びの中にも教職大学院で行われているような「ラウンド型の学び(と云っていいのでしょうか)」が広がり始めていることを実感した。Session Iの中で特に印象に残ったのが、お茶の水女子大学社会教育主事講習修了生である来住野清子さんの発表の中にあつた「大学院での『もやもやとした』学びが、職場に戻ったときに次の実践への活力になる」といった言葉だった。この言葉は、後半に行われたグループセッションでも取り上げられ、「COC (Center of Community)としての大学・大学院の意義」と一緒に議論され、「なぜ大学院が学び合うコミュニティの中心にならなくてはいけないのか?」といった質問も飛び出していた。

この一連の発表や質問のやりとりの中で私が感じたことは、実社会の中で日々行われる「学び」は決して『すっきりした』ものではなく、様々な条件・要素の中で絶えず変化し続ける『もやもやとした学び』であるということ。そして、それに対し、これまで学校教育の中で行われてきた「学び」は、明確な答えのある『すっきりとした学び』であり、その教育を受けて育ってきた私たち世代は、「一見して答えの無いような『もやもやとした学び』に抵抗感や拒否反応を起こしてしまうのではないのか?」ということである。学校教育での「学び」が実社会での「学び」と乖離した状態であること、そのこと自体が「生涯学び続ける」という社会教育を妨げる元凶となっていたのではないかということである。Session Iで社会教育関係者が多く集まったZone Bに参加したことは、現在、学校教育も大きな転換期に迫られている中で、「なぜ学校が変わらなく

てはならないのか?」「なぜ『世代を超えた学び』や『協働の学び』が学校に求められているのか?」ということをして、今一度深く考えさせられる貴重な機会となった。

2日目のSession IIでは、アカデミーコモン11階1フロア全てを使用し、福井ラウンドテーブルでお馴染みの小グループで机を囲んだ報告会が行われた。参加者は約120人、福井との相違点は、学校教育関係者以外の参加者の割合が高いことと、報告が午前に1本、午後1本で、午前と午後の報告の間にポスターセッションの時間が設けられていたことぐらいである。私が参加したグループは、5人のうち私を含めた3人が1日目にグループセッションで意見を交換したメンバーで、会の始めから親密な雰囲気できちんと語り合うことができた。午前中の報告①では、自身の安居中学校での実践を発表する機会を頂き、多くの意見や励ましをいただくことができた。中でも、福井県の教科センター方式の学校で行われている「異学年での学び」や「協働の学び」、「学びと生活をいかに融合させていくか」といったことや「教職大学院と学校との連携」が好意的に受け止められ、「ぜひ、福井での取り組みを全国に広めていってください。」という熱い励ましを頂けたことが心から有り難かった。

午後の報告②では、千葉県浦安市の公民館での非常に内容の濃い実践について語り合うことができた。一公民館の取り組みが市全公民館での取り組みへと広がりを見せていく過程での葛藤を聴き語り合う中で、その取り組みのもつ「価値」について多くの議論ができたように感じた。また、地域の子供達との関わりについても非常に多くのこと考えさせられた。本来ならば家庭や学校でしっかりと抱えなくてはいけない子供達も、公民館の支えでかろうじて繋ぎ止められている事例を前にし、「やはり、どんな時でも『学校』が子供達と社会を繋ぐ最前線であり続けなくてはいけないのではないだろうか?」と感じた。真の意味で「地域を支え、地域と共に学び・育っていく学校」を目指すことが、公教育機関としての学校に求められている本来の姿でないだろうかと感じた。

いま改めて振り返ってみても、本当に多くのこと学び考えさせられる貴重な経験をする事ができた2日間であつたように感じる。ポスターセッションの場では、報告①の中で問われ、上手く答えることのできなかつたことを松木先生に直接質問する機会にも恵まれた。また、帰路の米原駅では、柳澤先生からラウンドテーブルの歴史を語って頂けるというサプライズも待っていた。このような素晴らしい学びのチャンスを与えてくださった福井大学教職大学院に心から感謝をし、これを新たな実践の糧としていきたい。

教職専門性開発コース1年 堀江 春那

1月12日、13日(土、日)と明治大学で行われた東京ラウンドテーブルに参加した。東京ラウンドテーブルへの参加は自ら希望したものだった。東京へ行くことに対して少し迷いはあったが、多くのことを学べるのではないかと確信して希望した。それは、福井でのラウンドテーブルが大きく関係している。シンポジウムや学校の先生や大学の教授、学生と語り合う中で、福井の教育や福井大学の教職大学院について、福井大学以外の人の視点からの意見に触れることができた。さまざまな立場や考えの方の意見を聞くことが、改めて自分の学びや福井大学教職大学院について捉えなおすきっかけになったと感じている。東京ラウンドテーブルではさらにさまざまな考えに出会えるかもしれないと考えた。また、参加した院生は2日目に小グループで発表させていただくことになっていたことも理由の一つだった。発表に向けて自分の学びをつきつめて考える過程やまったく自分の背景を知らない方に向けて発表をすること、そこでいただけるであろう意見などが、自分の新たな学びにつながると思い、参加を希望した。

2日間のラウンドテーブルではシンポジウム、小グループでの報告、ポスターセッションが行われた。どの場でも学びは多く、充実していた。その中でも特に強く印象に残っているのは1日目のシンポジウムだった。シンポジウムは2つに分かれてが行われ、私は「学び続ける教師を支えるために—『教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議』の議論をめぐって—」というテーマのシンポジウムに参加した。シンポジウムでは協力者会議に参加している先生方からワーキンググループの途中経過についてや政権交代による教師教育改革への影響についてなどの話をお聞きしたり、2つのグループに分かれて、各大学の教員養成改革の構想と戦略について報告や討論をしたりしていた。

シンポジウムでは、私の知らない言葉が当たり前

使われていた。そのため、何に関する話題かも分からないことも何度もあった。また、一大学院生である私がすぐに活用できる内容はほとんどなかった。そのような状況であっても、かなり興味を持って話を聞いていたことに、自分自身でも驚いていた。なぜそれほど興味を持って聞けたのかと考えたところ、3つの理由が浮かんだ。まず、もともと私は「教員がいかに学び、力をつけるか」ということに関心があったこと。そのため、木曜カンファレンスで調べたり福井でのラウンドテーブルの教員養成に関するシンポジウムに参加したりして、教員養成の基本的な方向性や教職大学院の課題などの知識を少しだけ得ていたこと。教職大学院の利点だけではなく、問題点や違う考え方も聞いたうえで、自らの学びのフィールドである教職大学院を理解したいと考えていることなどである。

このように、自分がなぜ関心を持っているのかなどと考えたことはこれまでなかったため、そのような考えが出てきたことも、私にとっては新しいことだった。この考えがでてきたのは、2日目の発表に向けて1年間の自分の学びについて考えてきたからだと思う。私は、発表の内容を、1年間の自分の行動や考えに対して「なぜ」と問いかけながら書いていた。そうすることで、行動時の自分の考え方やその根拠となっていること、考えがどのように変化したのかが見えてくると考えていたからである。東京ラウンドテーブルへ向けた取り組みが学びにつながっていたのである。

東京ラウンドテーブルでは、ただ知識を得るだけではなく、自分の考えや変化に気づくことができたことが大きかった。この場での気づきは、すぐにどこかに活かせるものではない。だが、自分に向き合うことが自分の教育観につながってくると思うので、東京ラウンドテーブルでの学びをしっかり振り返り、実践につなげていきたい。

教職専門性開発コース1年 堀江 沙也香

1月12日、13日に行われた東京ラウンドテーブルに参加させていただきました。初めてのラウンドテーブルへの参加ということで語り手としての不安もありましたが、私の実践を全く知らない方に聞いていただくことで今後の展望をより明確なものにできればという期待も抱いていました。

発表に向けて、私は自分自身と向き合いました。子どもとのかかわり。現場の先生方とのかかわり。その中で私は何を感じて、どのように考えていたのか。その変化を追い始めると現場で起こるさまざまな事象への感じ方やそれに対する向き合い方が変わってきていることに気づきました。その過程で、当時の自分の感情がより鮮明に思い出されました。当時の私は、「何となくつらい」という言葉でしか表現できないあやふやな感情に悩み続けていました。しかし、現在の私は毎日悩みながら



も、当時のように「つらい」と感じることはなくなったように思います。私は、この変化を言語化し、ラウンドテーブルで他者と共有できるものになりたいと思いました。私が目の前の事象の捉え方が変わったのは、いろい

るなきっかけの中で私が悩み続けて何かを「学んだ」成果だと思ったからです。

東京ラウンドテーブルでは、教育委員会の方や病院の看護部の方、大学院生や学生の方と同じテーブルでした。「レジュメでは語りつくせない」と話すと、「レジュメを読みながら、あなたが話したいと思ったことが本当に語りたところだと思う」と言っていただきました。終始、和やかで心から安心して参加することができました。看護部の方が「『人間対人間』の仕事をしていると、それだけで『つらい』と感じて辞める新人さんは多い。メンタル的な悩みは、そういう仕事では尽きな

い。自分の感情を分析して、新しい展望が見えて来ているのね。」と笑顔で話してくださいました。今日まで全く知らなかった人に共感していただけたことが何よりも嬉しいと感じた瞬間でした。

ラウンドテーブルに参加して、自分の実践を何も知らない他者に語るということは、その過程を自己満足な学びに終わるのではなく、より確かなものとするために言語化していく作業であると思いました。自分の学びを改めて捉え直すことができ、本当に良い経験ができたと思いました。

伊那小学校 公開学習指導研究会に参加して

福井大学教職大学院 森 透

2月2日(土)長野県伊那市立伊那小学校の平成24年度の第34回公開学習指導研究会に参加してきました。今回は学部授業「教科生活基礎」の一環として参観希望の学生を募集して約30名の学生(1-2年生)、及び教職大学院の院生・学部生等も参加して総勢40名ほどで参観してきました。夜行バスで前日夜11時に大学を出発し、2日朝8時前に伊那小到着、夕方5時頃に伊那市を出発、夜10時頃に福井大学に戻るという強行軍でしたが、学生達は若いエネルギーでいろいろなものを吸収してくれたのでないかと期待しています。

今回のテーマは「内から育つー学びの道筋をたどり直しながら、自分を高めていく子どもー」で、「内から育つ」というメインテーマは平成3年度から変わりません。それまでのメインテーマは「学ぶ力を育てる」(昭和56年度-平成2年度)でした。サブテーマは平成23年度・24年度が同じです。伊那小のテーマは、常に子どもに立ち返り、子どもを主発点として考えていることに感銘をします。私は今回松木先生の代理で5年生の



「伊那まちにおよびて大作戦」の助言者として参加しましたが、いろいろな点で学ぶことが多かったです。豚さんやひつじさん、それにはじめてアルパカさんも飼育するという体験を子どもたちは熱心していました。いつも子どもたちの笑顔に感動する研究集会でした。

教職専門性開発コース1年 後藤 歩美

伊那小学校の実践は学部時代から何回も読む機会がありました。実際に伊那を訪れるのは今回が初めてでした。『羊小屋の柵を軽々と飛び越える子どもたち』『羊と一緒に円になって朝の健康観察をする』など、今まで何回も実践報告書などで読んだ場面を目の前で見て、どこか現実味のない独特の雰囲気を感じました。しかし授業を見終えて、嶋野道弘先生の講演を聞いて思ったことは、それが「特別」ではないということです。

伊那の自然豊かな環境の中で「材」に向き合うことからこそ、子どもたちが様々なことを体全体で感じる部分があると思います。しかし伊那の実践は、その環境によるものだけではなく、ひたすらに「材」と向き合う子どもたち同士が「材」の深い部分でかかわり合っているからこそ成り立っているのだと感じました。また、その子どもたちの内から出てくるありの

ままの姿、素直な言葉を教師が丁寧にとらえ、支えているからこそ、学びとしてつながっているのではないかと思います。そんな子どもたちの姿は私たちの周りにも必ずあるのではないのでしょうか。

伊那へ出発する日、私はなかふじルームの子どもたちと算数の授業をしました。1~6年生までの発達段階の違う子どもたちが、一緒に学ぶことのできる授業をしたいと考え、私なりに様々なことを考慮して授業をつくりました。そして授業を終えた時、課題はあるもの子どもたちのかかわり合い、学び合う姿を見ることができたことに満足感を感じていました。しかし、伊那から帰ってきた後に、一緒に伊那に行った院生と改めて私の授業の振り返りをした際、伊那に行く前よりも『もっと子どもの姿をしっかり見ていれば…。』『もっと教材について吟味すべきだった。』という思いが次々とあふれてき

ました。それは伊那の子どもの「材」とひたすらに向き合う姿、友達とかかわり合う姿をみて、本当の学び合うは、子どもたちの奥底から出てくる言葉でもって成り立つと感じたからです。

私の実践の中で子どもたちのかかわり合いは、私の至らない部分を子どもたち同士で補っていてくれたにすぎませんでした。私をもっと入念に子どもたちの単元に対するレディネスの把握や教材研究をしていれば、子

どもたちはもっと平面図形のより深い部分で議論し、学び合うことができたのではないかと思います。今回、授業実践の直後という絶妙なタイミングで伊那へ行くことができ、本当に良かったと思っています。伊那に行つて気付かされたこと、見えてきた課題を次の実践に活かしていきたいです。そして、いつかまた、できれば暖かい時期の伊那に行きたいと思っています。

教職専門性開発コース1年 北村 元輝

2月2日に伊那小学校の公開学習指導研究会に参加させて頂いた。自由参観授業は1年忠組「わんちゃんともだち」を、共同参観授業は4年直組「直組のあんづくり」を参観させて頂いた。ここでは研究大会に参加させて頂いた私の感想を少し書かせて頂きたい。まず伊那小学校に到着し驚いたことは、廊下に掲示されている児童の絵である。「上手」と一言では言い表せられないものばかりであった。主に学級で取り組んでいる内容について描かれていたが、どれも一人ひとりの思いがしっかりと伝わってくるものだった。これも児童が自身の成長を実感できる学習成果物だと感じた。また2つの授業を参観させて頂き、共通した部分があった。それは授業者が本時のねらいとすることを児童は簡単に超えて、自分自身で先行して追究していつている姿である。

1年忠組では「子犬と一緒に遊ぶ」という授業者のねらいを超えて、“どうすれば子犬とうまく遊べるか”“子犬は何が好きで、どうすれば近くに寄ってくるのか”と考えながら子犬と遊んでいる姿・言動が見て取れた。また4年直組では「自分の作りたい色の餡を作る」というねらいに対し、色だけではなく形・デザイン・トレイに入った餡の色のバランスなどにまで児童はこだわりながら和菓子に向き合っていた。どちらも児童の学ぼうとする意欲とこれまでの積み重ねられた思いが、参観させて頂いた1時間の中で実際に姿・言葉として表れていたように思う。

紙幅の都合上これ以上書けないことがとても残念に感じるくらい、私の視野が広がり、“子どもたちとつくる”とは何なのかを考えさせられる研究会であった。

拠点校だより

スクールリーダー養成コース1年 青木 美恵

附属小学校の研究テーマは、「協働して学びを深める授業をつくる」です。昨年度は、学びを深めるための「協働の姿」とはどのようなものか、また、そのとき教師はどのような支援をすることが大切かについて明らかにしてきました。

今年度は、協働による「学びの深まり」とはどのようなことかについて研究していくことになりました。そこで、まず、「『学び』とは教育的に価値ある子どもの変容」ととらえることにしました。そして、この変容を次の3つの観点でみていくことにしました。

- 「学びの意欲」：子どもたちの学ぶ意欲・関心の高まり
- 「学びの実感」：知識・理解の定着や技能の向上
- 「学びの活用」：思考の広がり・深まり＋今後の学習や生活に生かす力の向上

これらの観点を設定することにより、子どもの姿をとらえやすくなり、子どもの変容を明らかにすることができました。

本校の研究は、子どもたちの学ぶ姿、言い換えるとするならば、子どもたちが自分の考えや自分自身をつくりかえ成長していく姿を私たち教師が見取りながら進めて

います。具体的には、授業における子どもの言動をとらえ、その背景を読み取り、学びの意味づけをしています。「子どもの見取り」により、子どもの学びの現実をとらえ、次の授業づくりに生かすことができると考えています。しかし、「子どもの見取り」の意味は、これだけではありませんでした。

今年度の本校の研究、先生方の実践、自分自身の授業づくりを私なりにふり返ってみると、この「子どもの見取り」は「学びの見取り」であることに改めて気付かされました。教師は、子どもを見取りながら、子どもの学びの見取りをし、その学びのプロセスを明らかにしていました。学びのプロセスを明らかにし、子どもたちに示すことにより、子どもたちは「学び方を学ぶ」ことができていたのです。「学び」を「変容」と捉えるならば「学びの深まり」に終わりはありません。自分をよりよくつくりかえていくことこそ、よりよく生きることです。つくりかえながら生き続けていくことが「学びの深まり」であると言えるかもしれません。こう考えると学んだ結果を示し共有していくのではなく、仲間と共に学ぶ過程をいかに共有しながら学びを進めているのかを明らかにしていくことが必要なのではないかと思います。

さらに教師は、子どもを通して教師自身の学びの見取りもしていました。「協働して学びを深める」の主体は、「子ども」であると本校ではとらえています。協働して学びを深める子どもの姿を追っていくと「協働して学びを深める教師の姿」が見えてきます。私たち自身も、自分をつくりかえながらよりよく生きている姿が。そして、このよりよく生きる場であり、その支えになっているのは、附属小学校の教師コミュニティのありようです。「自分の実践を見合い、語り合う」場やそのサイクルが設定されている本校の研究体制ではありますが、それ以前に、自分自身を開き、語るができる教師同士の「仲間関係」が構築されているのです。それは、一人ひとりの違いやよさを認め合い、弱みに耳を傾け合いながら、何かをつくりあげたり、問題の解決にあたるコミュニティです。このコミュニティの中で、どのように

他者とかかわりながら、学びを実感し、活用し、そしてさらなる学びへの意欲につなげているのかという、教師自身の学びの過程を明らかにしていくことも「協働して学びを深める授業をつくる」という研究テーマに迫る一つの道ではないかと私は考えます。

2月に入り、本校でも新年度の研究の方向性について話し合いを進めています。どの先生方も、目の前にいる子どもの学びと自分自身の学びを見つめながら、よりよい研究のあり方について考えています。どのような方向に進んでいくかはまだわかりませんが、協働して学びを深める子どもたちと教師の姿を明らかにできたらと思います。そして、私自身、自分をつくりかえながらよりよく生きてきたことを私の拙い言葉で綴った記録、長期実践報告を仲間へ語って聞いてもらうことから始めよう、そう思う今日この頃です。

*Fukui Round Tables: Spring Sessions 2013
For Reflective Practice and
Organizational Learning
In University of Fukui*

実践し 省察する コミュニティ

2013.3.2-3

福井大学教育地域科学部 1号館・共用講義棟

主催：福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)
教師教育改革コラボレーション

共催：福井大学高等教育推進センター・教育地域科学部附属地域共生プロジェクトセンター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム・福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」

For Communities of Practice and Reflection



2013年3月2日(土)、3日(日)の2日間に渡り、実践研究福井ラウンドテーブル スプリング・セッションが開催されます。ここでは、2日(土)「専門職として学び合うコミュニティを培う 日本の教師教育改革のための福井会議2013」で開かれるフォーラムにおける4つのZoneのねらい、報告校、シンポジウムの内容および24日(日)「実践研究福井ラウンドテーブル2012」の概要を掲載いたします。

3/2

Sat. 12:40-17:40

専門職として学び合うコミュニティを培う

For Professional learning communities

日本の教師教育改革のための福井会議2013

Zone A 学校 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ：学校を変える

6月のラウンドテーブルに引き続き、テーマ「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」を前提として、今回は「学校を変える」という動的ネーミングを設定しました。学校での中心的な営みは「授業」であり、授業を変えることが学校を変えることにつながると考えられます。教科指導と生活指導(生徒指導)という2つの軸のとらえ方がありますが、この2つは別物ではなく、授業の中でこそ子どもを理解し子どもをケアすることが大事であり、授業そのものの組み替えが、子どもをまるごと理解し支援していくことにつながります。教科指導と生活指導の統一が不可欠です。また、学校を変えるためには、教師個人の営みとしての授業研究のレベルを超えて、学校として組織的に授業研究に取り組むことが極めて重要であり、そのためには、教師の同僚性・協働こそが非常に大事になると考えられます。今回設定した「学校を変える」というテーマは、授業を中軸に置きながら、それぞれの職場で授業研究をどのように組織化していくのかという課題に迫ろうとするものです。学び合う教師のコミュニティが原動力となった学校改革・授業改革の実践事例を手がかりに議論を広げ深めていきたいと考えています。

session I ポスターセッション 12:40-13:50

福井県内外の小学校・中学校・高校・特別支援学校から、学校拠点の協働研究に関するポスター報告が行われます。ポスター報告にもつぎ、各校及び参加者で互いの実践を交流します。

session II シンポジウム：「学校を変える」 14:00-15:20

①埼玉県新座市・県立新座高校 金子奨先生の報告

教育困難校と呼ばれた学校における、授業を中軸とした学校の組織化、教師の協働のプロセスを語っていただきます。

②富山県富山市立堀川小学校 石田和義先生の報告

歴史のある伝統校における授業を中軸とした研究の組織化、教師の校内研修のプロセスを語っていただきます。 <コーディネーター> 松本謙一（富山大）・森透（福井大学）

sessionⅢ フォーラム 15:30-17:30

先の2つのsessionを受け、学校改革・授業改革に挑戦している福井県内外の小学校・中学校・高校・特別支援教育センターから協働研究の具体的な報告をしていただきます。クロス・フォーラムを設けて各学校の挑戦を傾聴し、議論し、共有していきます。

Zone B 教師 学び続ける教師を育てる<人>と<組織>のパラダイムを考える

8月28日に中央教育審議会から公示された答申「教職全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、「学び続ける教員像」の確立とそれを支援する教育委員会と大学との連携・協働の必要性が強調されています。本答申では生涯にわたり学び続ける教師に必要な能力として、「探究力」「学び続ける力」等が挙げられています。このような力を育むためにはこれまで分断されていた養成と研修の在り方を問い直し、それらに関わる人や組織のパラダイムを転換させる必要があります。

今回は特にそのようなパラダイム転換の一つとして「学校拠点方式」を取り上げて議論を深めていきたいと考えております。学校と拠点とした力量形成を支える連携・協働の在り方について、具体的な実践事例をもとに、いかにパラダイム転換を図ったか、また今後どのような改革が求められるか、について共に考えていきます。

session I ポスターセッション 12:40-13:50

「学校拠点方式」の養成・研修に関するポスター報告にもとづき、参加者で互いの実践を交流します。

session II シンポジウム：学び続ける教師を支える「学校拠点方式」 14:00-15:20

「学校拠点方式」による養成・研修について、それぞれの実践事例について基調報告と課題提起をしていただきます。

<報告予定機関> 福井大学・和歌山大学・山形県教育委員会

<コメンテーター> 勝野 正章（東京大学） <コーディネーター> 松木 健一（福井大学）

sessionⅢ フォーラム 15:30-17:30

先の2つのsessionを受け、福井県内外の各地域の大学関係者・教育委員会関係者・学校関係者の三者に参加していただき、学び続ける教師を育てる（人）と（組織）をめぐるそれぞれの状況を報告していただきます。小グループでの各報告を踏まえて、参加者の実情と課題も共有しながら意見を交流していきたいと考えております。

Zone C コミュニティ 世代をこえて学び合うコミュニティをコーディネートするー持続可能な社会と若者の社会参画ー

今回、Zone Cが掲げるテーマは、「世代をこえて学び合うコミュニティをコーディネートする」です。この間、Zone Cでは、コミュニティの発展における「持続性sustainability」の問題が共有され、検討されてきました。知識基盤社会という言葉に象徴されるように、21世紀を生きる私たちが地域や職場で出会っていく課題は、個人的・個別的な取り組みでは必ずしも解決しえない、より複雑で高度なものへと変化し続けています。地域の発展を支える自治や学習についても、その持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われています。これは、コミュニティの持続的な発展に向けて、世代をこえてつながり学び合うことをどのように支えていくことができるのかという課題です。

このようなテーマの深まりと歩調を合わせながら、Zone Cでは参加者の世代の広がりが生まれつつあります。今回のラウンドテーブルでは、各地で先駆的な地域活動を組織する高校生・大学生も実践交流の輪に加わることになりました。地域、領域、そして、世代をこえて学び合うというZone Cの試みを通じて、互いの実践の展開を捉え直し、持続可能なコミュニティの発展を支える自治と学習、そのコーディネーターの専門性をめぐる問いを深めていきます。

session I では、互いの活動をポスターを通じて共有します（2階ロビーが会場です）。session II は、地域活動に参画する新しい世代である高校生・大学生の取り組みを交流する「特別フォーラム」と地域の自治と学習を支える力をどのように持続的に結んでいくのかという問いを深める「シンポジウム」に分かれます。続くsession IIIでは、6人程度の小グループを組み、地域・世代をこえて互いの活動を交流・共有していくクロスセッションを進めながら、あらためて世代をこえて学び合うことの意味、それを支えるコーディネーターの役割について考えます。

Zone D 授業 授業改革の扉をひらくーもし、わたしたちが子どもだったらー

学びの専門家を目指す教師たちは、常に「子どもたちの成長発達を支えていく根幹となるような学力を培うことができているのだろうか」「子どもたちの持っている様々な可能性を引き出すことができているのだろうか」といった問いを抱きながら、その探究の確かさを自らの実践に求めてきました。Zone Dは、そんな教師たちの学びの姿に光を当てながら、教科や校種の枠を越えた授業改革への可能性を探る実践コミュニティを創出していきたいと考えています。

今回のラウンドテーブルには、武蔵野美術大学の「旅するムサビ」のメンバーをお迎えします。「旅するムサビ」は、武蔵野美術大学の教職課程履修者である学生たちが中心となり、全国各地の学校や教員研修の場を訪れ、これまでの教材観にとらわれない授業やワークショップを展開し、教師・子ども・学生らが「共に学び合う場」を数多くつくり出してきました。フレキシブルな視点と強い志を抱く未来の教師たちと共に、美術という教科を使って、教科を超えた創造的な授業改革の扉をひらいていきます。

session I は、教職を目指す学生たちが開発してきたプログラムの実践と省察をポスター発表します。学校や授業における活動の可能性を貪欲に探究していくとする学生たちの取り組みから、思いもよらぬ授業改革への扉を発見することができるでしょう。session II は、「旅するムサビ」プロジェクトの仕掛け人、三澤一実（武蔵野美術大学教授）先生からZone Dのテーマを掘り下げていくための問題提起をしていただきます。三澤先生は、学校・大学・美術館・地域・教育委員会等が連携することで生まれ

てくる学び合いプロジェクトの数々を、学生たちと共に立ち上げてきました。常に実践を通して、現実の課題と向き合いながら革新的な学びの場をつくってきたこれらのプロジェクトは、教師たちの意識や授業研究会のあり方を問い直し、様々な教育現場に活力を与えてきました。今回の基調報告では、このようなプロジェクトの実践と省察から、「旅するムサビ」が果たしてきた役割といった視点などを抽出し、教科や校種を超えた授業改革への探究の場をつくっていただく予定です。sessionⅢでは、まず、「私たちが子どもだったら」という視点から、それぞれが【授業】を捉え直すためのワークショップに取り組みます。武蔵野美術大学「旅するムサビ」や福井大学教育地域科学部美術教育サブコースの学生たちによって誘われる「誰も見たことのない学びの世界へ」を探究し、そこに潜在する学びの意味を自らの実践を重ね合わせながら授業改革の扉をひらくための議論へと展開して行きたいと考えています。

ラウンドテーブルに先駆け、武蔵野美術大学「旅するムサビ」と福井大学教育地域科学部の学生による公開授業が下記の予定で実施されます。こちらも、ぜひご参加ください。公開授業はⅠ・Ⅱ・Ⅲは、全て学生作品を使った対話による鑑賞活動です。ご都合の良い時間に合わせて、授業を参観してください。14:40からの学生と教師の学び合いによる授業研究会のみの参加も歓迎致します。次のメールかFAXに所属・氏名・連絡先を記入し申し込んでください。

【申込先】 坂井市立丸岡中学校 後藤 亜好 E-mail: goto-d2@sakai-school.ed.jp FAX: 0776-66-4116

【開催日】 平成25年3月1日(金) 【場所】 坂井市立丸岡中学校

公開授業Ⅰ 8:35-10:25 公開授業Ⅱ 10:35-12:25

公開授業Ⅲ 13:30-14:20 授業研究会 14:40-15:40

3/3

Sun. 8:30-14:00

実践研究福井ラウンドテーブル2013
Spring Sessions

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中で初めて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。語られる展開に耳を傾け、活動の場を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

報道FILE

▼ 平成24年12月26日福井新聞朝刊

他校の指導法吸収

中堅教員が実践成果報告 福井大

中堅教員が所属校での実践成果を報告し合うグループに分かれ、本年12月25日、福井市の福井大文京キャンパスで、福井大が主催する「実践成果報告会」が開催された。福井大の教員らは、所属校での実践成果を報告し合うグループに分かれ、本年12月25日、福井市の福井大文京キャンパスで、福井大が主催する「実践成果報告会」が開催された。福井大の教員らは、所属校での実践成果を報告し合うグループに分かれ、本年12月25日、福井市の福井大文京キャンパスで、福井大が主催する「実践成果報告会」が開催された。



所属校での実践を発表し合う小中高校の教員ら—25日、福井市の福井大文京キャンパス

Schedule

3/2 sat - 3/3 sun 実践研究福井ラウンドテーブル2013

3/13 wed - 3/17 sun グローバル人材育成推進事業（上海師範大学視察）

3/22 fri 学位記伝達式

[編集後記]

先日訪問した伊那小中学校では、授業中の子どもたちの発言にそれまでの学びの履歴が感じられ、とても驚きました。何気なく切り取ったことばに厚みがあるのは、子どもたち一人ひとりが自分自身のまなざしで現象をとらえ、自分のことばで語ってきた経過があるからだと思えました。

今年度も長期実践報告会の季節となりました。それぞれの先生方の長い実践の営みを皆で共有できるのをとても楽しみにしています。(Y)

教職大学院Newsletter No.49

2013.2.16発行

2013.2.16印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp